



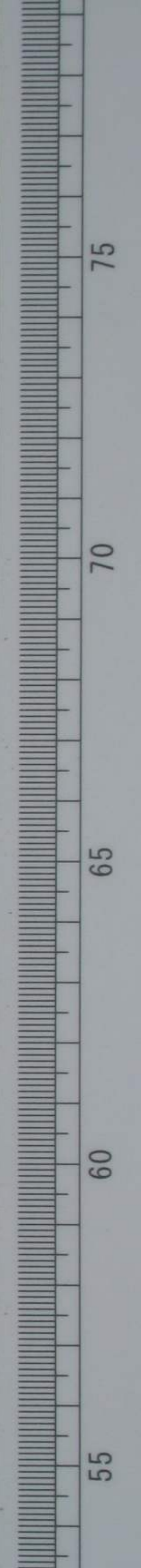
土井 晚 翠 著 曉

鐘

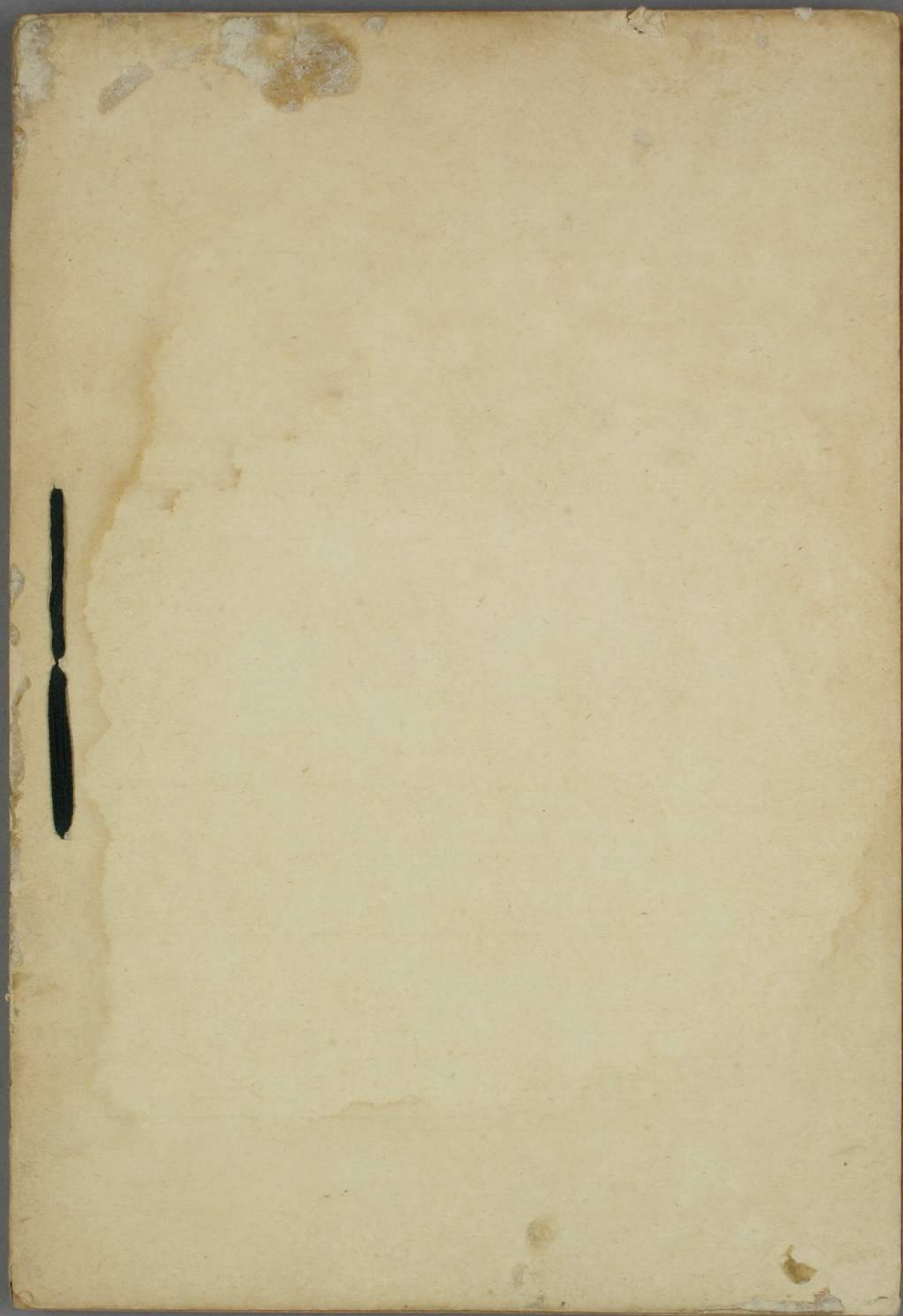
有千閣 依藤

發行

北洋書局







土井晚翠著

曉鐘

有千閣
發行
佐藤

土井晚翠著

曉鐘

有千閣
佐藤發行

Wenn ich nicht sinnen oder dichten soll,
so ist das Leben mir kein Leben mehr.
— Goethe.

La Muse est faite pour : chanter l'ideal,
aimer l'humanité, croire au progrès,
prier pour l'infini.
— Hugo.

田部
川井
...

四十餘年
 睡夢中
 而今醒
 眼始朦
 朧
 不知日
 已過亭
 午
 起向高
 樓撞曉
 鐘

王陽明

曉鐘目次

萬里長城の歌	一
花上の露	一〇
月と水	一二
惆悵吟	一三
夏の夜	一六
暗と眠	一八
秋興八首	一九
岸上の終焉	二五
白桃花	二七
白梅	二八
平和	三〇
弔吉國樟堂	三二

曉鐘目次

破船	四二
天上	四三
無限	四五
黑龍江上の悲劇	四六
登高賦	五七
朧夜	六四
清怨	六六
夕の姿	六八
富嶽之歌	七一
附錄	
汀上の逍遙	八三
深淵	九一
故郷の墳墓	一〇六

曉鐘

土井晚翠著

萬里長城の歌

(一)

生ける歴史か數ふれば齡は高し二千年
 影は萬里の空遠き名も長城の壁の上
 落日低く雲淡く關山看す／＼暮れんとす。
 征驂恨み留りて俯仰の遊子身はひとり。
 絶域花は稀ながら平蕪の綠今深し。
 春乾坤に回りは霞まぬ空も無かりけり。

曉

鐘

萬里長城の歌

二

天地の色は老いずして人間の世は移らふを
歌ふか高く大空おほぞらに姿は見ぬ夕雲雀。

嗚呼跡ふりぬ人去りぬ歳は流れぬ千載の
昔に返り何の地かかれ秦皇の覇圖を見む。
殘壘破壁聲も無し恨みも暗し夕まぐれ
春朦朧のたいなかに俯仰の遊子身はひとり。

(二)

三皇五帝あど遠く六王終りて四海一
四海の黔首ひれふして雷霆の威に聲もなし。
『わが宮殿を高うせよ』一たび呼べは阿房宮
『わが邊境を固うせよ』二たび呼べば萬里城
春は驪山の花深く秋は上郡の雲暗く。

管絃響き雲に入る舞殿の春の夕まぐれ
袂を舉げて軽く起つ三千の宮女花のごと
花を散して玉觥たまがひに浮かす歌扇の風もよし
彫龍の欄奥深く薫ほる蘭麝らんじやの香を高み
珠簾たまきりを洩る、銀燭ぎんじやくの光消きぬか夜や明けむ。

西臨洮せいりんたうの嶺高しこ、遼東りやうとうの谿深し。
流を埋め山を截り壘りを連ぬる幾千里
かゝりの焔天えんてんを焼きつるぎの光霜凝ほり
殺氣ころしき夏猶ものすこく守るは猛士二十萬
漠ばくのこなたに胡笳こか絶たてて匈奴こつとの跡ぞ遠さかる。

(三)

『北夷の憂絶果て、境は堅し國安し
先王の書も焚け果てぬ天下の儒者も埋まりぬ』

曉

鐘

萬里長城の歌

三

曉

鐘

萬里長城の歌

四

わが萬世の業成りぬ君王の思しかなりき。

知るや夜半の阿房宮後庭深く森暗く

歌臺の響よそにして獨りあらしのつぶやきを

『浮世の花の一盛り褪むるに早き色見すや』

聞け長城の秋の營旌旗の暗に消ゆるとき

またく光露帯びて星の竊かにさやくを

『富も力も一場の夢覺め果てん後思へ』

(四)

春靜かなる東海の縁を涵す波の上

不死の金闕遠くして童女五百の舟いづこ。

絳霞の光天上の花とこしへに匂へども

土に下れば沈瀼の示すは獨り世の脆さ。

至尊の榮は高くども名を玉籍に留め得じ
金人十二鑄なせどもかれに無象のつるぎあり。

心を焦し身を碎くあゝ韓朝の一孤臣

爾の策は成らずとも無常の風はあらかりき。

天地靜かに夜更けて獨り汜橋のかたほとり

流は咽ふ秋の聲燃ゆる心も静まりて

思ふやいかに人力の脆きを命の定りを、

鐵推血無し博浪沙、鮑魚臭、有り沙丘臺。

(五)

嗚呼死屍未だ冷せずしてかれ「萬世の業」いづこ

暗君嗣きて上に在り倭豎の害のなぞあらしき。

民の怒は火の如く成卒は叫び兵は起ち

楚人の一炬閃めきて咸陽の宮皆焦土。

曉

鐘

萬里長城の歌

五

曉

鐘

萬里長城の歌

六

霽れざる空に虹懸けし復道の跡今いづれ。
雲あらざるに龍飛べる長橋の影はたいかに。
衰蘭露に悲めば遺宮空しく草の宿
驪山の麓春去れば花ことくく涙あり。

斬蛇のつるぎ炎精の光もさはれ極みあり。
甘泉殿の夜半の月かれも浮雲の恨みあり。
其移り行く世の習ひ二京の花をよそにして
邊土に立てる長城の連雲の影あゝ絶えず。

(六)

邦は亡びて邦に嗣ぎ人は代りて人を追ふ。
鼎は移る朝二十歳は流るゝ曆二千。
中華幾たび烽舉がり長城の壁越來り
また越去りし國たみの數さへいかに世々の跡。

山川影は替らねど春夢空しく跡も無し。
群雄の覇圖いたづらに残すは獨り史上の名。
獨り邊土に影絶えず齡重ねて二千歳
殘壘苔に今青む長城の影尊としや。

民の膏血世の笑ひ逆政のかたみそれながら
歴史の色に染められし萬里の影をなつかしき。
其面影に忍びでゝ泣くは懐古の露のみか。
暮春の恨み誰がために霞も咽ふ夕まぐれ。

(七)

霞も咽ふ夕まぐれ遊子俯仰の物思ひ。
北夷禦ぎし長城の昔の跡は替らねど
時世空しく流れては中華の姿あすいかに。
秦漢魏晉移り行く昔の跡を引換て

曉

鐘

萬里長城の歌

七

西のあらしの吹き寄する黄海の波今あらし。

西曆一千九百年東亞のあらしあすいかに。

中華の光り先王の道この民を救ひ得じ。

愛を四海に傳ふべき神人の教いま空語。

看すや豺狼の慾飽かて「基督教徒」血をすゝり

群羊守る力無く「異教の民」の聲呑むを。

俯仰古今の物思ひ遊子の恨いつ盡さむ。

征驂恨み嘶ける響きを返す壁のもと

思も遠く眺むれば霞たゞよふ大空の

自然の樂も絶果てつ關山暮れて星出でて

恨を含む長城の姿は暗に呑まれ行く。

さらば別れむとこしへにわが長城の壁のもと

《盡きぬ思は大空の星の光に任せ置きて》

其星移る千載の時の流の末遠み

替らで影を尙どめむ殘壘にまた忍びで、

我世の今日を歌ふべき後の詩人はわれしらず。

嗚呼「永劫の脈搏」はいづれの時か絶え果てむ。

人生舊を傷みては千古替らぬ情の歌。

破壁聲無き傍にまた落日の影を帯び

流るゝ光積り行く三千の昔忍ぶ時

かれ永遠の聲擧げて何の國語に歌ふらん。

興廢移り悲喜まじる一人の跡一國の跡

笑の蔭に涙あり暗のあなたに光あり

玉樓の花風恨み残壘のあらし天の樂
嗚呼千載の後の世の詩人よ既に君の歌
今も響けり長城の暗に隠るゝ壁の中。

(明治三十二年春稿)

(註) * 天下の兵器を収めて咸陽に聚り銷して鐘磬金人十二を爲くる(十八

史略)

* * 張耳始皇を博浪沙に狙撃して成らず○始皇巡狩の途沙丘平臺に

崩す群臣私して喪を發せす一石の鮑魚を以て其臭を亂る(同)

* * * "Pulsschlag der Ewigkeit" Liebmam 氏の句を直譯す、

花上の露

春のたましひ花とよび
曙の精露とさふ。

雪より白き花の膚
汚に染まじ露の恩。

玉より清き露のしづく
碎けじ落ちじ花の恩。

春のあけぼの花と露
結べる契り誰が手より。

あゝ花露によりてゑみ
あゝ露花によりて生く。

月 と 水

山の端いづる夕の月
谷間流るゝ夕の水
天と地とは隔たれど
二つかたみにこひしたふ。

影は親しくやせども
むつみ語らんすべもなみ
月の恨みに空くもり
水の恨みに瀬はむせふ。

かくて空なる月の旅
かくて下界の水の旅

いつか望みの影うひて
流れは澄みぬ空晴れぬ

月は落ち行く西のそら
水は流るゝ西のうみ
海と空とは隔てねば
月と水との戀なりぬ。

惆 悵 吟

(二)

天女の胸に憑りかゝり
移ろひ果てし花束を
抛ち棄てゝわれ泣くど

見しもはかなの夜半の夢。

覺めても熱きわが涙

拭ひもあへず窓あけて

見れば緑の青葉かげ

落ち行く月は圓からず。

いみじきものはかなしと

今さらのるか夜半の鐘

音も霞の底深くが思ひ。

引かれて遠きわが思ひ。

(三)

花にあこがれ花に泣く

浮世の春は暮れにけり

霞む月かげ夜半のかけ

八重の櫻の木もどの

短き夢をいかにせむ

さめずありなばあゝ戀よ。

花散り果てし青葉かげ

今更清し夜半の月

昨日の影を戀ふべしや

今日の光をめぐべしや

思に迷ふ人の子に

悟りをたまへあゝ神よ。

夏の夜

はやたそがれの影寄せぬ。
 風おもむろに吹きかよふ
 都大路の夏けしき
 洗ひすてたる夕立の
 名残柳に玉とめて。
 まばゆく照す電燈の
 光はにはほふ夜の花。
 湯あがり姿逍遙の
 すがた幾むれ袖軽く
 咽ぶはたかきローズの香。

れは空高く月いで、
 八百のちまたの隈もなく
 照す涼しき夏の夜や
 雲はしづかに收まりて
 残る稀なる星のかげ。
 そゝろあるきに夜ふけて
 袂は重し露ふかし
 月なゝめなる時計臺
 ふたつの針の重なりて
 うつも高しや時の數。
 傾きかゝる天の河
 仰ぎて家路さして行く

逍遙の群あどもなし
ちまたのあるじ今はたゞ
月の光と吹くかせど。

暗 と 眠

喘ぎ疲れて西ぐらに弦月遠く沈むあなた
劫初我世に造られし光照らざる森の中
『暗』と『眠』と影ふたつ
かれ氣を吐て人界の愁を夜半におしぬぐひ
これ手を舉げて煩へる天地を夢に誘ひ行く。

秋 興 八 首

一陣吹きぬ秋の風。
雲より送る惨悽の自然の吐息たがためか。
山河姿を改めて非情も暮の色恨み
清怨堪へず聲を呑む詩人ことくく涙あり。
誰か彩虹を攀ちて空高く
淋しき下界の塵の色を
かみ銀漢の流を洗はむ。
嗚呼一歌われすでに傷みぬ。
天は黄昏を帯ぶ一様の愁。

『玉露楓樹』も秋の歌
杜陵の詞仙金鐘のしらべは餓を補はじ。

瀛西の空眺めても詩神の寵兒みな愁
 桂樹のはまれ緑葉の光は花の色ならじ。
 狂げて兒童の師と詫ふる垂翅は況して不似の分。
 さらば滄浪の曲に人の世の窮達のあとを忍ばんか。
 嗚呼二歌、われわれを嘆きぬ。
 雲は残陽を蔽ふ惆悵の色。

秋は更け行く青葉山故園の姿いまいかに。
 扶搖のあらし音を絶えて雄圖は夢か五城樓。
 *桃李の盃の缺けしより三百年の春移り
 山川の靈替らねど偉人の叫びまた聞かす。
 波間の月の影冴ゆる秋は名に負ふ千松島
 *汀の寺に誰れか今とはん英主の不死の魂。
 嗚呼三歌、われ郷を忍びぬ。

菊は荒園にははふ瀼々の露。

扶桑の帝土千載の時運は毎にうすかりき。
 桂はな吹く西の空薰り比へんすべもなみ
 さらでも脆き文の華今また秋に逢へるかな。
 流水遠く春去りて谷に芝蘭の花碎け。
 逸韻空にむなしくて九阜の鶴聲もなし。
 月はすみだの秋の汐、岸べのいはりいつまでか
 蟄龍の怠りに風雲の氣の潜めりや。
 嗚呼四歌、文を愁へぬ。
 風は簷端を掃ふ落葉の聲。

海若驕る秋九月。
 浩々の水眺むれば思ひは遂に窮まらず。

曉

鐘

秋興八首

二十二

波のあなたを邦いかに。
邦の眺めの数いくつ。

花は掩はん時聖千古の墓
月は照さん雄都七丘の墟。

歴史の染むる長江の流れは廻る肥沃の土。
氷河を下す萬仞の峯は日に照る夏の雪。

空しく夢に入り去りて今年の秋も更けにけり。
嗚呼五歌われ西をしたひぬ。

烟は波上に横たふ長汀の夕。

帝都の春に背き去りし友は山川今幾重。

夢も迷はん邊城の搖落の秋、歌ありや。

やめよ世を泣く慷慨の涙は酒と化しもせじ。

一飽足らば昭代の民ども笑へ眩まくら。

白露に咽ぶ寒蟬のわれもねになく夕まぐれ

たゞ一片の雲の色に遠く千里の思を寄せん。

嗚呼六歌、われ友を惜みぬ。

影は遙空に迷ふ雁字の群。

一輪の明月に二千里外も暗からじ

高樓簾を捲き去りて捲き去りて

關山のあなた異郷の空を思はいや。

三十六の峯青き舊都の夏の夕まぐれ

一葉の舟嵐峽の緑の流、水澄みて

情は傷みぬ千載風月の色

文は論じぬ一代才人の筆。

歡會夢は長からで秋はそいろに更けてけり。

嗚呼七歌、われむかしを戀ひぬ。

曉

鐘

秋興八首

二十三

露は松篁に満つ銀蟾の影。

輪影西に傾きて九天の露聲も無し。

人間わが世明月の光は常に圓からず。

三千の素娥瑤臺の舞曲は誰か耳にせん。

下界の絃歌いみじきはたゞ愁絶のしらべどか。

千載何の處にか理想は實に返るべき。

清夜の一歌たゞしはし秋のかほりを身にしめて

廣寒殿の風のねに蒼茫の思託さばや。

嗚呼八歌われ曲を了へぬ。

月は星河を渡る五更の曉。

(明治卅二年秋稿)

*「只把春風桃李扈仙臺藩祖の句、公の蹟は松島の瑞巖寺にあり。」

岸上の終焉

白布のとばり拂はせて

涙にくもる目に見やる

夕海原はしづかなり。

ひとつ東の暮の星

そはたましひの行くさどか。

檐の松風さよなかに

叫ぶ恨はたがためぞ

ともしび暗し無象の世

見るかいまはの彼が目は

魂は半ばは過ぎ行きて。

あかつき清き八重の沙
 沖路はるかに誘ふ風
 雲を拂へばさしのぼる
 朝日の影ぞまどかなる
 途を迎ふや逝く魂の。
 やがて黄金の波湧きて
 すなごりの歌いさましく
 四方に漕ぎづる白帆舟
 其舟遠し波のあなた
 其魂遠し星のあなた。

白桃花

朝日影ろふ浅みどり
 谷間を過ぎて聲高く
 清く流るゝ春の水。
 みなもに戀と思いを
 春もろ共に浮べさりて
 白桃の花いづち行く。

消ぬせぬ雪の色みせて
 羊ひとむれ草飼へる
 流に添へるみどりの野。
 まひるの空に夢みたる
 牧の子笛を捨て泣きて

曉

鐘

白

桃

花

二十八

白桃の花去るを見き。

百の柴舟しらは舟

こむる紅夕霞

廣き流れのかた岸に

緑暮れゆく青柳

柳のもとに流れよりて

白桃の花また去らじ。

白梅

白梅はす語らぬ後思ひ

梅が香どもに袖にして

つらき定めを恨み詫び

たい行末の遠きたのみ

契りて二人別れけん

春やむかしの朧夜に

月は夢より淡かりき。

たどへば廣き空の中

彗星の友道ふたつ

廻りあひては別れじと

契るもしばし夢のまや。

ふたつおのく其旅に

心どもなく別れ行く

定離そらにもなからずや。

別れし跡のつれなくて

曉

鐘

白

梅

二十九

はやもひと歳廻りきし
春やみやこの春ならず
袖につゝめる梅が香の
こゝに匂へばこゝに照る
花と月との影うつゝ
あゝその人は夢にして。

平
和

海に黄金の波を湧かし
空に焰の雲を染めて
しづかに落ち行く夕日の姿
見よあめつちの胸の中
おほいなるもの彼にあり。

海にうつむく影をてらし
空にいみじき香を吐きて
岩かげにたつさゆりの姿
見よあめつちの胸のうち
うるはしきもの此にあり。
おほいなるもの光を射
うるはしきもの色を染めて
夕にみつる愛と平和
花は落ち行く日を暮ひ
日はたやすむ花を戀ふ。

弔吉國樟堂

一

玉輦花を積みおせて霞に沈む春の神。
 別れを遠く欄に憑り流にのぞみ見送れば
 空も鎖魂の色深き五城樓下の夕まぐれ、
 碧樹碎けて鶴去りて白玉樓に君ありと
 都のたより一封の涙の痕は夢ならず。

嗚呼白日の飛び行くを誰かは空に留め得ん、
 夢を抱て流水の光を慕ふ香をはやみ
 散りてはかなき人生の花の行るや今いづこ、
 縁は烟ふる一望の柳眠りて聲もなし。
 雨を含める夕ぐれの雲も有情の色にして。

青山花を葬りて夕の森に月黒し。

無心の調か牧童の姿は見ぬ笛の音。

暮天の暗に包まると愁の耳に聞きとれば

萬古盡させぬ人の世の恨を述ぶる靈の歌

閻浮のよりの泉より思を汲むに似たりけり。

二

昨日は齡二十六けふは永劫の曆に入る。

芳蘭の花脆うして運命の神ねたみあり

一瞬の前君ありき一瞬の後君あらず。

四歳都の假やどり契りし道は淺からず。

斯文の光仰ぎ見るひとつの窓の影ふたつ

其影ふたつ人の世に今百年の別れとや。

曉

鐘

弔吉國樟堂

三十四

夕日いろどる不忍の池の汀のさゝれ波
岸の逍遙袖かるく手を携へし日もむかし
隅田の堤夕ぐれの朧の月も散る花も。

思いためる雪の暮正月京をたちいでつ
忍ぶが岡のわけばのをまたも共にど契りけん
名残の聲は春風に今もひゞけど人あらず。

昨日は山河九十餘里今は生死の關幾重。
月の光の名にしれふ千松島かげ波のへに
夏を忘れて歌はんと契りし人はいづこや。

三

都を思ふ今更に母校の春の夕げしき。

朱門の垣は深緑楊柳のかげ暗からむ。

ゆふべ花咲く電燈の光まばゆき玻璃の窓

*千百の巻集めきて探れる世々のあとかたや。

それはた空し學の海ささきのあらしを傷みきを。

あゝあゝ細く光ある雙眸の星消落ちて

かたみと残る一魂の灰のみ郷に今歸る

火輪大地を馳けり行く東海の驛五十三、

生時のむかし仰ぎ見し企望のかげの富士の嶺

今は愁の雲閉ぢて神秘の色や深からん。

薩摩瀉波のあなた。夏や來ぬらし古城の夕。

新なるその墓。あられたるその糸。

やがて照らん春を忍ぶ半輪弦月の光。

曉

鐘

弔吉國樟堂

三十五

曉

鐘

弔吉國樟堂

三十六

やがて聞かん血に叫ぶ千聲杜鵑の恨。
これより南樓夢常に短からむ。
これより西海波とこしへに咽ばむ。

かくて三尺の塚ひとつ(恨や凝りて石と立つ)
凄冷の面とゞむるはただ薄命の夢のあと。
是より日々に深み行く苔の緑に花も無く
泉臺暗くとこしへの夜にむくろはしづみ行く。
土にむくろは歸り行く——魂の行くゑはいづこがや。

四

こよひ淋しき雨のおとに愁は花の上ならず。
天地の染むる暗の幕にこもるは人の世々の思ひ。
名も日ぐらしの里のゆふべ烟と消えしかたみの雲

えぐれてこゝに我宿に花を碎ける雨と降るか。
のきばのしづく夜半の窓に無韻のことば何の恨み
ともしびなれも心ありて忍ぶか過ぎし人のなごり。

えづくの音も絶ゆるとき更に『静寂』の語る思ひ。
ともしの光消ゆるのち更にさゝやく『暗』の言葉。

五

油は盡きぬぬばたまの暗のころもに纏はれて
花しばみ行く床の間のあやなき薫り身にしめつ。
聞くは友呼ぶしめやかの遠き蛙の夜半の歌。
流轉るてんの聲と姿とに波咽び行く廣瀬河。

乾坤盡さじ永却の神秘のといき又こゝに

曉

鐘

弔吉國樟堂

三十七

曉

鐘

弔吉國樟堂

三十八

名残の春を逐ひやりて愁ふ一陣夜半の風、
夢こそさわげ昨日まで色はにほひし花の窓
ろの窓押せば暗深く今や「無限」の影ひとつ。

萬古の光動きなき北斗こよひは見ぬわかず、
珠貫貝聯天狼の影やいづこの空のはて、
くしき力の蔭くところかなたに靈の邦ありや
そこに不盡の春をみて石こどもく歌ありや。

こゝに愁の花咲きて涙の谷に霧暗し。
こゝに移るふ春の世に契短き塵ふたつ。
ひとつ跡なく消え失せて秘密のかどをくゞり行き。
ひとつ名残の夢さめて永き思に沈み行く。

六

思よはとまる何の郷愁よ終る何の邦。

銀河のよそか星のよそか空の海やむ雲のよろか。

千萬の生、千萬の死、無限の起り、無限の亡び。
かくて流星の影も消えぬ、かくて三春の花も枯れぬ。

黄金の色見るめ眩む夕の雲もかくは褪めぬ、
白銀の光霜こはる夜半の月もかくは落ちぬ。

七

幽淵暗し億劫の生を呑み去るそはなれか
死よ青白く電光の雲間かすかに馳けるごと
塵界のねもに閃めきて無常をしめすなが姿。
哲學光薄くしてろの神秘を穿ち得ず。
宗教迷多くしてその真相を悟り得ず。

曉

鐘

弔吉國樟堂

三十九

曉

鐘

弔吉國樟堂

四十

紅雲褪めて瑤臺の曲はわが世の風と荒れ
 彩紅断じて天上の春は下界の花と散り。
 劫灰絶えず吹き拂ふ世々のあらしに人の子は
 た、力無く眠を舉げて天のあなたを夢むるよ。

愁よもだせ百年の齡短し人の春。

嘆よ眠れ煩惱の力かよはし墓の淵。

穹窿高く黄金の光を凝らす神の子の

また、く眼に開ちこもる不言の教讀めすども、

喜べるもの笑めるもの傷つけるもの泣けるもの

すべての上により来る平和のめぐみあ、思へ、

あらしよ、雲よ、散る花を誘うて遠く行く水よ。

行て大空暗の中に、去りて大海波の底に

倦みし、疲れし、困みし我世の夢の旅終へよ。

嗚呼夢深き人の子の悟りに遠き空のあなた、

有象の世界幾萬の群を包める空のあなた、

誰かは拒む想像のするどき羽も猶たゆき、

幽玄微妙圓満の高き無象の邦無しと、

天の光を閉ぢかくすあだなる人の屋を出でよ、

靈の光を蓋ひ去る僧と俗との聲捨てよ、

人類断じて暗深き夜半の空に佇めば

天地しづかに靈籟の無絃の琴をかなでいで

人の心の底深く聲は囁く「たゞ信」と。

(明治三十三年暮春稿)

※彼が大學院に於ける専攻の學科は歴史ふりき。

※昨年彼が同郷の秀才某史學を修めしものまた幽冥の客さふりき。

曉

鐘

弔吉國樟堂

四十一

破船

半輪の月斜なり、
地平線上雲黒く
形さながら世を笑ふ
悪魔の影に似たるかき。
破船のへりを洗ひさりて
波はむなしく立ちかへる。
波また寄せてまた洗ふ
折れし橋やれし舟
語るは何の悲劇や。
叫喚の名残たいあらし。
月はすぎましかばねの

残れる數に青白う。

自然の力、波の力
引きてしづめて海底に
ふたつの影を呑まんま
えはしは命か猶残る
あゝ破船の姿波のこなた
あゝ半輪の月波のあなた。

天
与

光のおは海、色のおほらみ。
千百萬の日を集めて
熔すににたる波のかたはら

神人碧玉の板とりて
焔の筆に鑄るは日記か

「あした 星雲やゝさめぬ。

太陽の光てりましぬ。

地球の泡生れいでぬ。

樂園の花さきそめぬ。

「ゆふべ 星雲なほさめぬ。

太陽の光衰へぬ。

樂園の花うつろひぬ。

地球の波は碎けぬ」と。

天上高し日ひと日

下界幾億の歳か劫か。

無 限

あらしの鞭に花泣きて

胡蝶の夢もさめはてつ

春のひかりはうつろへど

仰げば理想の空高く

「無限」は照りぬほゝるみぬ。

人のつばみのおさなごの

しまはの床に母は泣く

家の光は消え行けど

仰げ理想の空、高く
『無限』は照りぬはゝるみぬ。

尊き道の名によりて
罪なき血汐すゝられつ
教のひかりくもれども

仰げば理想の空、高く
『無限』は照りぬはゝるみぬ。

黒龍江上の悲劇

一

大江流れて四千露里、水は長空の影ひろく、

雲烟迷ふシベリヤの南を遠く貫きて、

未鞆靴の海に入る黒龍の流、萬古の波、

記せよ——西曆一千九百年なんぢの水は慕なりき、

五千の生命罪なくてこゝに幽冥の鬼となりぬ、

其悽慘の恨みよりこの岸永く花なけん、

千載これより大江の名、罪の紀念に伴はむ、

萬世これより大江の線、東亞の地圖に血を染めむ、

犠牲は平和の清の民、賊は兇暴のコサック兵、

その豺狼を狂はして群羊をかりしものやたそ、

『露軍の中將ゲリブスキイ』怒の波に名をのせて

四千里遠く大江の水よ四海に奔り行け。

あゝなんぢ、殘虐の將、虎狼の兵。
千秋何の處にかよそになんぢの類を見ん。
上帝の怒盡くるまで、大江の流枯るゝまで
ろの罪惡をどこしへに萬邦の民よ皆誼へ。

皇天の光亡びずば『歴史』よなんぢの責思へ。

嗚呼鋼鐵の筆とりて正義の女神永劫の

おもてに既に記せるを君戰慄の目に見ずや。

『西曆一千九百年黑龍の水血なりき』と。

二

あゝあまがける『想像』の無象の翼身に借りて
恨も長き黒龍の岸の其日の様を見よ。

煙塵空を暗うして一隊の虎狼かけりきぬ。

大江の音よどむまで見よ號哭を天におげ

老幼男女いましめの繩に驅らるゝ數五千。

同胞五千いくとせかこゝの異郷のかりすまゐ。

錦文ゆうべ窓に入る故園干戈のおどづれに

思いためる夜半の夢、あけぼのちかくおどるけば

翼ならして荒鷺はやさしき鳩の巢におちぬ。

牙を揮うて豺狼は羊の檻に襲ひきぬ。

六軍の王師賊なりき、軍旗のはまれいづれぞや

掠奪つきて驅られ來し清人五千途いかに。

大江の水、天ひたすこゝ、黒龍の岸のうへ。

まなこ焔に燃ゆるひかる虎狼ひとしく吠え立てぬ。

『平和を破る清の民、どく江を越へ郷に行け』。

曉

鐘

黒龍江上の悲劇

五十

群鴉亂れて雲に入る翼はあはれ彼もたじ。
 舟やいづこ、橋やいづこ、清人泣きて訴へぬ。
 「順良の商估清の民、いかで平和の敵ならむ。
 流は墳墓、大江の逆捲く波を君見ずや」
 虎狼涙に和がじ、露人の答たゝ砲火。

いかづち落ちぬ、白日の光は暗と消に失せぬ。
 天の万象ことく、怒のあらし吹きさりぬ。
 雨か彈丸の空飛ぶは、夜か硝煙のうづまくは。
 伏屍は岸に山を積み、溺死は江に水せきて。
 聞け、號哭と叫喚と、天地は今か修羅のちまた。
 恩愛の父子手を取りて奔流の波にさらはれつ。
 新婚の夫妻抱きあひて虎狼の兵に屠られつ。

泡の大水に消ゆるおと、糞のあらしに散るがごと。
 藁の猛火に焼くると、蠟の焰に熔くるごと。
 「正義よ悼め罪なくて逝けり平和の民五千。

三

江流逝きて波暗し、浮べるかばね今いづこ。
 去れよ四千里わたつみの底は露人の影なきに。
 去れよ長鯨汐を吹くあらびは彼にまさらじを。

岸のしかばね青白く鉛に似るを誰か見る。
 齒をくひしばり虚を握み砂泥にまみれ血に汚がれ
 天を仰ぎて例れ臥す惨憺の姿たれか見る。

綾羅ひとたび紅の花を包みし袖いかに。
 銀鬚きのふは幼子のあみを仰へしれもいづれ。

曉

鐘

黒龍江上の悲劇

五十一

無垢はさかから白蘭の蕾に似たる魂いづこ。

其さま見じと「夕ぐれ」はおもてを掩ふて過ぎさりぬ。

「夜」よ、あらしに吹かれきて暗のころもに彼を蓋へ。

陰火亂れて嗽々の魂は恨に堪へざるを。

千秋ほかに比なき悲劇のあとばかりなりき。

いざや陰府の火を逃れ血汐の壺を傾けて。

サタンよ祝せ、人の世になんちのよさし尙盡さず。

四

萬馬のひづめ飛びちかふ兵戈のあらびいくたびや。

教徒の怒り血に燃えて倒れし犠牲いくばくや。

さはれ千歳何の時「歴史は知るや、われしらす」

神を崇むる大帝の六軍の師故なくて

羊に似たる外邦の五千の民を屠れりや。

見よ幻を天の中、銀鬢かゝやく一巨人。

無限の光胸にあり、鮮血のあと足にあり。

「われ東西の文明の光を一にあはしてき。

露人の罪にわが最期あゝかくまで汚れぬ」と。

「たそやなんちは」彼答ふ「十九世紀の霊を見よ」。

玉殿のよる静かにて星斗まぶたの重きとき。

錦繡のとばり暗うして香のかすかにくゆるとき。

高塔の鐘しづまりて侍衛の夢の深きとき。

東亞の領のおどづれに寶冠ひとつひれふして

その民のため國のため罪を萬軍の主に謝せよ。

五

嗚呼五千の靈、清人とかれ生れしや何の罪、
 彼牛羊に劣りしや、彼禽獸に類せしや、
 覆載の恩、故ありて造物彼に拒みしや、
 ささは一たび無知の暗、頑冥の夢さめやらず、
 血を宣教の二師に染め罪に一州の地を替へき、
 いま朝政のかげもなき國歩のなやみ時の不利、
 『同胞五千罪なくて異郷の暗に魂泣く』と
 卒士いづれの處にか彼はた冤を訴へん、
 嗚呼北極よ、南極よ、萬邦の民の良心よ、
 基督教の道德よ、十九世紀の文明よ、
 語れ——皇天の正義今無きや。

六

世界の義人聲なきや、爾の耳は襲ひたりや、
 基督教徒たゞざるや、四海同胞の訓いづくぞや、

普天の詩人網織の一絃すでに絶えたりや、
 かれバトモスに現れし幻今は跡なきや、
 さきにシオンに照りいでし光は暗に沈めりや、

人種のはだの白か黄か、差は愛憐の妨か、
 神にふたつの道ありや、愛にふたつの別ありや、
 『愛の教の一の民罪なきわれの血を流し、
 愛の教のはかの民皆そのわざをよしとしぬ』
 異教の民の訴をわれ願くは聞かざらむ。

うの悽愴の訴を無情の耳にきかむ前、
 震へる魂よ、ひれふして高き至聖の名を思へ、
 時は遙けしいにしへに返る一千九百年、
 橄欖山の夜半の暗にあらしも泣けるダッセマ子

そこに憂の盃はひうけて祈りし影をあゝ思へ。

七

嗚呼事終り罪なりぬ、千秋の悲劇かく過ぎぬ。

なんぢ無象の羽はねかるき黒龍江の岸の風。

九天のあなたセラヒムの萬軍の列かさわけて

咽ぶ銀河の波と共に永く露人の罪鳴らせ。

なんぢ滄溟の水に入る黒龍江の波の音、

五千のかばね葬りし流の響たぬすして

四海の濱なみにどこしへに高く清人の冤を呼べ。

七星北斗十二宮、夜半よぢの光滅びすば

神人共に憤いばるこの兇戾を忘れざれ。

冤を憐む百世の義人、なんぢに聲あらば。

東亞の圖上大江の線を血汐に染めていへ

『西曆一千九百年、黒龍の波かゝりき』云。

(註)頃者客の露領ブラゴエチエンスク府より歸り來るあり、就て同市悲劇の眞相を問ふ、客慈然として語りて曰く同市附近一帶の岸は清人の屍累々として惡臭鼻を衝き嗷々の鬼氣人を襲ひ慘憺としてうたゝ行人の腸を斷たしむ、八月二十日余等一行の武市に着してより滯留殆んど十餘日、其間アイグンの爐煙は遠く(天に連りて尙未だ止まず、一脉の黒煙は濛々として遙かに大市邑の昔を想見せしむ、露曆六月一二の両日清兵武市を砲撃したりと稱する跡に就て之を見るに僅に或民家の一端を損じたるに過ぎずして露人當時の騷擾却て怪訝にたへず、軍勢知事グリプスキイ中將は武市清人の内應を慮り、同四日一隊の守備兵を全街に出して清人を捕縛せしめ五千餘人の老若男女を狩りて黒龍沿岸に送り砲火と江流とを以て悉く之を燼せり、武市の清人五千、内潛伏通軍命を全うせしもの僅に五六十人に過ぎず(九月十九日東京朝日新聞、同廿一日ヂヤ、バンタイムス等参照)

登高賦

玉露しづかに空を洗うて乾坤こゝにまた秋を見る

歳は明治の三十三、西暦まさに千九百年、
大虚のおもて永劫のうへ人界の争あゝ未だ終へじを。

さもあらばあれ萬古の眞、自然の色は長に澄ゆり。
天地蕭森の氣を湛へて山川連く畫圖を披く
五城樓外西丘の夕、思ひは縹緲の空に入る。

江山ろゝるに秋の思、うの秋の精、秋の風。
吹くか星斗の震ひ動きて靈の如く消ゆる空より、
大虚の呼吸清く遠く空に搖曳の雲を拂うて。

星雲の影こほらんとして銀漢の波咽ふほどり。
天上秋の光引て今搖落のわが世に下り。

遠く鴻雁の列を誘ふて下界の山河いづれを經るや。

楊柳の岸かげうすくセインの流咽ふ處。

菩提樹畔の逍遙の群も夕に消ゆるほどり。

弦月旗はしづむボスホル海峽の暮。

牧笛聲は愁ふ中央亞細亞の野。

行てシベリヤ大荒の東、黒龍の水萬古咽んで。

神人共に憤る蠻旅の罪をかたる處。

去りて黃海の波を越え、長白山の雲を拂ひ。

更に遙に扶桑の空に玲瓏清き富士のたかね。

其影やぞす東海の名も清見瀉田子の浦。

鏡とすめる波のおもに秋をしらして過來しや。

白蘋の州紅蓼の岸、漁翁の夢の清き處。

鮮血の流屍骸の岡、文明の鬼の狂ふ處。
 山川風土互に替る大地の旅幾千里。
 玉殿のゆふまぐれ醉生の夢を驚かし。
 落葉の夜半の窓詩人の情を動かして。
 中天搖曳の雲と共に吹きさり吹きくる無限の秋風。

五城樓外西郊の夕、その秋風の聲に色に
 高きに登り眺めやりて獨り悠々の思つきず。
 英雄の霸圖猶おとをどむる廣瀬の流青葉の森。
 水は寒山の影をひたして溶々遠くはしるあなた。
 碧は深し萬里滄溟の水、其波を越え海を越え。
 行くく吹て雲を拂ひ思を誘ひ詩を含み。
 天地の呼吸清く遠く無限の旅を追うて進まん。

千叢のすゝき波を亂して滿山の秋今まさに深く。
 夕陽いつか西に入りて餘光の遠く溢るゝ處。
 山河自然の雄麗をよそひて示すは天上無窮の榮か。
 その雄麗の景に對し、この清冷の風に吹かれて。
 思は長し氣は遠し。塵骸しばらくは聖かれよ。

人間歴史ありてより星移り行く五千歳。
 進化のあとは短くて禽獸の域遠からず。
 一塊の地球今も猶たゞ反嚙のにはどして。
 世紀最後の秋風はこゝに悲哀の曲と吹く。

詩人哲人いくたりか我世にいで、道説ける。
 靈鷲の峰に法の歌、橄欖山の愛の聲。
 オレブ、シナイの嶺の上、アラビヤ、ベルシャ野の邊。

光は暗にかゝりて名あり言あり道ありき。
遺流千年遠くして今聖壇の焰消ぬ。
博愛の教悼むべくたゞ呑噬の具となりて。
虎狼みだりに滔天の罪を文明の名に犯す。
妻は汚され身は斬られ國は削られ屋は焼かれ。
天を仰で血に咽ぶ民よ、異教は何の罪。
大義を叫び唱ふべき輿論の聲ももだせるか。
良心の麻痺に耳聾ひし基督教徒何の名ぞ。
かくて美妙の天地の裏たゞ流血の場にして。
世紀最後の秋風は悲哀の曲と吹き去るか。

嗚呼おほいなる無窮の靈。
天を張り、海をのべ、雲を巻き風を吐き。
日月を驅り、山嶽を震ひ。

千萬の星を造り千萬の世を治むるもの。

風にありて吟じわれにありて歌ひ。

花にありてゑみ、星にありて照る。

俗僧の悟らざる、迷信の汚さる。

宗派の私せざる、空理の知り得ざる。

愛の神、進化の神、詩人の神。

爾の胸にわれよりて爾の靈にわれ祈る。

爾のまして人こゝにあり。

合理のこと必ず現實、現實のこと必ず合理。

有情の天地いつまでか常に混擾の局として。

人種の差異に同胞の四海の愛を壊るべき。

あゝ願はくは爾の呼吸天のはてより地の隅に。

吹き來る無限の風となりて禍惡悉く吹き拂ひ。

光と愛と詩とをして永く此地を掩はしめよ。

世紀あらたに替る後秋風愁の曲ならず。
其行くところ吹くところ歡喜の色の世に満ちて。
あらしの聲も天上の無窮の樂がと響くまで。

(十一月一日國見峠にて起稿)

臙 夜

よるの櫻の木がくれに
笑むは羽はあるちさき子か。
引くかしばるか白銀しろがねの
弓かおぼるの月影か。
まじるも熱あつき二人ふたりの息いき。
打つもひとしき二人の脈。

燃ゆる思に聲絶へて
語るは二人のまみどまみ。

夢より淡く地にうつる
影と影とは手を取りて。
雪と散り來る花びらは
ふたりの肩にわけうけて。

いみじき脆き春の夜の
霞にしづむ鐘の聲。
ふたりの耳に聞きわけば
無常の音にはあらずかし。

鳴呼あめつちの戀燃て

曉

鐘

清

怨

六十六

月と花との契れる夜
誰かは谷むわかき世の
戀と春とに酔へる夢。

清 怨

途げなば何の戀ならん
酒、酔とならば何のかひ
月と戀とは春の夜の
たゞ臍こそゆかしけれ。
清きはたが名たが戀か
春は今宵も花なるを
あなた興津のあだ波に

月は今宵も碎くるを。

よその戀路の恨きく
みたりの友に涙あり。
過世あやしき人の子が
鬢のはつれや袖の香や。

どもしびまふし打そむき
拂ふもよしな膝の露
もみの小袖のうらみつゝ
今宵もぬれん枕紙。

その口べにの筆かりて
月と花との影に添ひ

曉

鐘

清

怨

六十七

障子にうつる瘦する身の
はそる思をしるすべく。

途げなばさはれ何の戀

酒酔とならば何のかひ

月と戀とは春の夜の

たゞ朧こそゆかしけれ。

夕の姿

鐘のひびき、水のひびき、

うする、光、うする、烟、

あゝ別なり夕の姿。

しづまる風、收まる雲、
睡りゆく花、覺むる星、
あゝ別なり夕の姿。

無韻の歌、無窮の教、
無聲の樂、無限の思、
あゝ別なり夕の姿。

あゝおさなごが甘き乳と
愛とを湛ふる母の胸に
頭をよせて眠ふる如く

「夕」のころもの裾のひだに
浮世の煩ひ浮世の惱み

曉 鐘

おほいなる手のかけ

七十

つゝみて静かにわれは休まん。

おほいなる手のかけ

月しづみ星かくれ
あらしもだし雲眠るまよなか
見あぐる高さ空の上に
おほいなる手の影あり。

百萬の人家みなしづまり
煩惱のひいき絶ゆるまよなか
見あぐる高さ空の上に
おほいなる手の影あり。

富嶽之歌

昊

夕をかざる玉鉤の一彎遠く消沈み
暗人間の世に落ちて今は壺中の夜もなかば。

有聲無象の窮まりはこゝ穹窿の空の上
敷も千萬永遠の姿を凝す星の花
わが射る光途遠く流るゝ末を見おろせば

曉 鐘

富嶽之歌

七十一

影朦朧のたゞなかに西崑崙の雲の嶺
冷煙こほりうづまきて泰山暗し鬼神の府
羅浮天台のおもかげも今は下界の暗の底。

千里二千里三千里烟波眠れる東海の
うな原遠く眺めやるわれらの光さすところ
渾沌の世に湧き出でし姿不變の富士の嶺
太古の雪の膚清く暗を照して立てるかき。

あらしも今は収まりて人頼絶ぬさらばいざ
光と共にわが露を露もろともわが歌を
下だし送らむ仙嶺の頂遠く裾廣く。

露

光合みて珠とこり珠とこほりて露と呼び
暗にもしるき香を添ふるわれ銀臺の星の精
長松の蔭暗うして鶴の静かに眠るとき
幽谷のあらし収まりて蘭の微かに匂ふとき
西に傾く銀漢の流の末と下り行く。

行くゑは遠し東海の波まに近き富士の嶺
嶺に下れば白銀のまた黄金の水湛へ
麓に布けば花のへに帝郷の夢もの語る。

嶺と明水

珠貫貝聯かけ凝はり玉露となりて嶺の上
千古の雪のしたゝりも交へ湛ふる水かゝみ

寫る光は仙嶺の夜半の星のこぼる影
酌みて飛仙の盃の沈澁の味思ふべく
餘滴靜かに谷あひに玉と碎けて走りては
行末遠く香を浮けて麓の花を誘ふべく。

花

高ねおるしの夕かせに
われ咲き匂ふ花の子ら
こよひ御空の友そゝぐ
戀のしづく身にしげき。

見渡す廣き八州の
裾野の夜も靜かなり
かしらを垂れて行く水に

さゝやく思ひ人やしる。

こゝに開きてこゝに笑み
こゝにしほみてこゝに散り
過ぎし幾春幾千とせ
自然の子らと友なりき。

御いつかしこきみこの御手
かざすつるぎに散る焰
夷滅びてすめろぎの
よさし廣みし世もむかし。

時おし移り紅に
白きは替る旗の色

君が裾野の狩りくらの
たけさ競ひし様もまた。

春のつばくら秋の雁

いろちの驛の行返り

振ふ錦の花の袖

うつろひ行くもきのふにて。

いつしか布かる黒がねの

道に近づく西ひがし

烟あらしになびかせて

火輪かけかふ世の姿。

時は移りぬ人去りぬ

獨り裾野の花の子ら
替へぬむかしの香をとめて
胸にはつゝむ歌絶えず。

こよひしづくの身にしげき

御空の星の戀の歌

受けて傳へて行く水に

さゝやく思ひ人しらじ。

流

銀蛇幾すち幽谷の泉しづかに集りて

ねは玲瓏の玉いくつ碎けて走る夜の空

西と東のいさら川流るゝ道に呼びつとへ

靈山の名を身に負ひて下るも長し六十里

曉

鐘

富嶽之歌

七十八

けさは浮べぬ白帆かげ夕は洗ひぬ汀の日
今はた誘ふ一ひらの花にのせ行く星の夢
わだつみさして道遠く行けば流れん時も世も。

海

潮は通ふ東海の流みなぎる三千里
銀山碎け飛散りて行くる四海の沖はるか
経緯異なるもゝの岸洗ひて歸る千重の波
波に明珠の影鑄りて光は震ふ星の色
いさりび時にはのめきて煙は迷ふ清見潟
夜深き岸の松が枝に仙女の樂は響かねど
こゝに流の送り來し花に無限の春の歌
あしたの光照りもせば我も自然の樂かなで
扶桑の鎮め靈山の姿を波に涵すべく。

風

其影宿す万頃の東海の水下に見て
高ね下りし夕あらし無象の翼身は軽く
北斗の影も見えぬまで波路はるけし幾千里
椰子橄欖の香にははふ南溟の空吹拂ひ
暖潮の蒸すむら雲のむらがる友をいざなひて
今こゝろ歸れあけばのゝ空台近き富士のもと。

雲

歳のかなかばは夜の暗暗に替れる紅血の
日に氷山の影ゆるぎ波もあらしも凝ほり行く
千古の冬の北洋の眺さびしき空の上
萬里を翔くる鵬の羽を忽ち借れる自在の身
南をさして驅け行けばよもより集ふ友の群

曉

鐘

富嶽之歌

七十九

率ゐて東海の芙蓉の峰の空近く。

詩 神

はやも下界の空しらむ時風雲のいざよひに
天地創生のあさぼらけ昔のあとぞ忍ばるゝ
暗逃れて旭陽の光はじめて照りしとき
四大おのゝ其則に就きて渾沌の去りしとき
われ九天の水引て東海萬石の波湛へ
玉闕の柱つんざきて芙蓉千仞の基おきぬ。

天地の間靈岳の氣に清風の吹てより
黃鶴露を吸去りて秋白帝の樓に飛び
青鸞花を啣み來て春瑤臺の仙を乗せ
彩雲永く一帶の天衢に通ふ路引て

神韻妙詩おのづから嶺に收まる幾千秋。
此邦いまだ此山を歌はん聲はあらずとも
玉露明星もろとも永く宇宙の靈に聽き
花萼川流どこしへに中に不朽のしらべあり。

嗚呼東海の君子國。史は百王の跡遠く
二千餘年の春ふけて斯文の華の遅くとも
香はかんばしき千載の未來の望無からんや。
群巒遠く下に見る芙蓉の姿雪の膚
清きは民の心たれ高きは民の思たれ。
積水淵を湛へてはうち蚊龍の湧くがごと
積塵山を築きてはかみ風雲を捲くがごと
長きに忍ぶ此邦の理想は實と現はれて
天地無窮の「美の靈」に民の融化し入らんとき。

扶桑の俗を改めて八采の芙蓉比なき
影東海の波のへに萬邦の仰ぎ視なるとき。
其時今にはのみせて靈山の空明けわたる。

見よ萬頃の海鳴りて波黄金の花開け
紅雲錦の粧を凝らす朱陽の曙の色
希望の光うらわかく峰千秋の雪に照り
愛と匂と聲樂と皆ひとつなる天上の
無限のはまれはの見する富士のたかねのあさぼらけ。

(註) * 朧月のこと

* * 富嶽頂に「金明水」「銀明水」あり

* * * 星のこと

* * * * "Beyond the starry dome, in the realm of the blessed, Love, Music and
Fragrance are the same."——Anon.

曉鐘 終

附録

汀上の逍遙 (ユーゴー作)

第一 逍遙

すざましき潮の底におほいなる渦巻あり、
其秘密の深淵より湧き出で、
みどりのたゞなかに雪のごとく。
泡沫の旋風波上に碎けぬ。

此飛沫の淵より神は何を造り給ふや、
曙の光りはこゝに何を注ぐや、夕の暗に何かこゝより出るや
海はこゝに注ぐいたづらに其波を、
雲は其霧を、あらしはその響を。

あらしは其響と共に。潮は其泥と共に過ぎさりぬ。
漁人の恐るゝ旋風は
このものすどき淵の中に現はれて
常に同じ場と同じ沫とを保つ。

漁人は語る「かしこに尊き波の上に。
失せたる幼子は降誕節の夜を待ちて
人界に汚れし其翼を清めんと来る。
天使となりて天上に飛去る前に」と。

われは曰ふ「神は潮の先に絶壁の先に
かしこにかく白き清らの場をおきぬ。
おほいなる自然の胸の中
悪のたゝなかに善の姿たらしめんため」と。

第二 逍遙

海には泡。陸には沙。

みどりの中に黄金の光は白銀の光と混じぬ。
われは洋々たる大氣のひびきをきく
遂に沈黙におほはるゝ遠き大なる響をきく。

呷く海の岸にひとりの子は歌へり。
何物もおほいならず。何物もちひさからず。
神は創造の上、受造の上に
同じ黄金の星と同じ縁の大空とを置きぬ。

われらの運命は微。われらの幻は美。
霊は身軀を捕へて大空にあぐ。
人はおほいなる二つの翼もて飛べるもの。

ひとつの翼は思想なり、他の翼は愛なり。

すべてのものしづまりて、おこそかにやさしく、力あり、

舟は港に入りき鳥は巢に歸り

すべてのもの去りて休みにつきぬ、余は

大虚の中に無限の「愛」脈うつを覺ぬ。

たゞ風——彼は巖の上に芦葉をかゝめ

また歌へる幼子の聲をはこびさる、

嗚呼風彼は草葉をかゝめ

また同時に遠く歌をはこびさるよ。

うは何かあらむ、こゝに物みな互に愛し互に睦む、

心の中に暗なかれ、にがき思の惱なかれ、

言につきせぬおほいなる平和は
絶えず大なる靈の底より大なる波の上に来去す。

第三 逍遙

日は傾きぬ、「夕」は彼を追ひて

地平線上を染めぬ。

汀上の石によりて白髪の一老翁

悄然落日に向ひて坐しぬ。

彼は老牧者なり山上の牧者なり、

昔はわかく貧しく幸なりき自由なりき、

夕の影丘陵をねぶりしとき

其笛林中に幾たびか響ける。

今は老いて富める過去のかたみ

彼はおほいなるやからの長となりぬ。
牛羊野より歸り來るとき
世を離れて彼は天を思ふ。

沈まんとする日は昇らんとする日に劣らず。
老牧者はこのみどりの天の下にゆめむ。
目前の大洋は悠々波を堪へて
墓に臨める義人の希望に似たり。

嗚呼おごそかの時刻よ、山、海、風
悉く黙して其騒ぎを收めぬ。

老翁は將に沈まんとする日を望み
日は將に終らんとする老翁を望む。

第四 逍遙

神よ、影に染む山々いかに美はしき。
海いかにやさしき、空いかにすめる。
過ぎ行く月日何かあらむ。

我は無限に觸れぬ、我は永劫を見ぬ。

あらしよ、うれひよ、我靈の内に黙だせ。

我心かくまで神に近づきしとはあらざりき。
落日は焰の目もて我を見ぬ。

おほいなる海我に語りぬ、われは身の聖きを覺ふ。

我を憎む者に幸あれ、我を愛する者に恵あれ。

我はわがすべての時を靈と愛とに與へむ。

譽を求むる者はおろかなり、理をあさる者は愚なり。

余は——余は只愛するを知るのみ、残れる齡幾何もあらじ。

紅日沈みかゝる海上より星は出でぬ。

鳥は歌ひぬ、波は脚下に叫びぬ。

莊嚴のたゞなかに日は落ちゆきぬ。

あゝ見よ、靈いかに大なる、人いかに小なる。

すべての造られしもの、燃ゆる火、震へる海

みな至上者の名をたゞなかば知るのみ。

彼等の發する響きを集むるはわれなり。

おのゝものは片語を綴り、奈は全句を語る。

淵よ、爾と等しくわれ聲を天に擧ぐ。

海よ、我爾と共に夢む、山よ余爾と共に祈る。

自然は清淨永遠の香。

余は——余は優美有情の香爐。

深淵 (ユーゴー作)

人

あらゆる非生の間にありて獨り生ある靈を見ずや。

猛獅を沙漠に逃げしむるものは我なり。

戸閉づるとき鍵を造るを知るものは我なり。

われはバツカスといひ、ノアといひ、デユーカーオンといひ、

セイクスピアといひ、ハンニバルといひ、セイザアといひ、ダンテといひ、

勝利の劔を取り「影」を逐ひ、暗を驅りて。

あらゆる恐の中に入り、あらゆる暗の中に進む。

われブラトウとなりて能く見。

われニユートンとなりて能く探る。

光榮のアゼンスは梟より出でずや。
壯大のローマは狼より起らずや。

大空の猛鷲驚きいていふ。わが途遂に爾におくる。』

われ墓の中にキリストを有し塵の中にヂョブを有し、
衡平を保ちて兩手に肉と靈とを運ぶ。

われ遂に人なり主なり自由あり。

我は古のアダムなり。我よく愛し我よく知り我よく感ず。

我「生命の樹」を抱き、さながら嵐の呼吸の如く、

金果累々の枝を震ひて曰ふ

『民よ、走りて而して拾へ』と。

かくてあらゆる果物は雨の如くに落ちぬ。

わがため、わが子のため、人間のため、

科學は恵みの天より降り、生命の果は永劫の根よりいづ。

あらゆるもの萌し、あらゆるもの育ち。

野火の林を掃ふが如く『進歩』は天を仰で走り、

『過去』を呑み去りて萬物みな進み行く。

われ欲すれば物みな従ひ、不屈のもの悉く譲る、

われは全能の神に似たり。

彼は蜜を作り、われは酒を醸す。

先に獄なりしもの今は宮殿なり。

われ南極と北極とを結び、

靈を電光の翼に載せ、

子ムロットの鐵弓を張り、

鏑を鳴し矢を飛ばし、

四海に放ちて、わが言となす。

距離なるものは今すでに存せず、

ライン、ガンダス、オレゴンの流、

わが見るところ恰も同車の旅客の如し。

老いたる巨人其名は「望」といふもの。
我今之を矮人どなしぬ。
わが奮進の前タイタン嫉みて頭をもたげ、
フランククリンの電光を飛ばすを見て、
ユーカサス山上驚きの聲あり。
むかしデユピターが塵中に投せしもの今フルトンとなり、
鯨鯢を驅りて大海をわたる。
カルバニは「死」を滅し。
ボルタは天使の劔を熔かす。
世界はわが聲に震ひて替り、
カイン死して「未來」は若きアベルに似たり。
我再びエデンを得ん、われ再びバベルを興さん。
我なくば何ものか存せん、自然は初なり、我は終なり。
嗚呼地球、爾の主たり王たる我を見ずや。

地球

爾はたゞわが一小虫なり。
睡眠、憂苦、冷熱、飢渴
爾は無数の煩を負はす。
爾老いては幻なり、死しては爾たゞ影なり。
爾は塵に去り、我は白晝に残る。
われは常に春あり花あり、愛あり、あけぼの曙ありて、
千萬の年を経て猶わかし。
我一粒より大樹を作り、我一核より長松を起す。
我は葡萄の房を染め、或は黄穂の束をつかぬ。
晝の十二時夜の十二時はでやかなる姉妹の如く
手を取り舞うてわがおもてを廻る。
我は源なり、混沌なり、われ物を葬りわれ物を創む。
緑の空に「朝」の生れしとき我そこにありき。

ラエスピアスはわが工場なり、ヘクラ山はわが吹^か爐^こなり、
我はエトナの高き煙突を赤うす。

われクツコー山をゆるがせばピレネースの嶺また震ふ。
我に僕として星ひとつあり。

『夕』來りてわが一面に黒布を掛くる時は
やさしき月ありてわれを照す。

凶人もし森の中に、暗の中に。

影の中に逃るゝときは

我この燈を取りて彼を追ふ。

われ火の中、波の中、空の中に生を起して、

或は虫を生み、颶風を生み、鯨鯢を生む。

わが生ける圓球は大水深林高山に

掩はれて恰も胃を破るに似たり。

土星

微かにつぶやく聲は何ものぞ。

地球よ、爾一粒の砂。

かの一片の灰に伴はれて狭き境を廻^{めぐ}る何の用ぞ。

我は壯大の綠空にわが大圓周を畫く。

大虚は見てわが雄麗に驚く。

わが大寰は青白き空を紫にして

恰も金丸の如き七ツの大月を抱く。

太陽

しづまれもだせ大空のもとに、わが遊星よわが群臣よ、

我は牧者なり爾は牛羊なり、

二ツの車大門を過ぐる如く

土星と地球と並びてわが最小の噴火口に入らむ。

混沌よ我は法なり、泥よ、われは火なり、

見よ、われは生命なり中心なり、

太陽なり。永劫なる光のあらし也。

天^シ狼^ア星

あ、此原子何をか語る。もだせ塵なる太陽、もだせまぼろしよ微けき光よ。

其牛羊大空に散る牧者よ、遊星のあるじよ、緑の空の中爾七八の牧をもてる何の效ぞ。

我は壯大なる圓球の中に百千の火球あり其火球の小なるもの猶百の月を有せり。

あ、夫の微球と並びてかゝやくも益なし、矮人星は巨人星を見るとあらじ。

アルデバラン

天狼眠りぬわれ覺めぬ、かれは殆んど動かず、

我に白と赤と緑と三ツの太陽あり。

各世界の中心となりて無形の鎖に繋がりてめぐる。

其速きことさながら酔へる焰の如し。

電光は曰ふ『われ彼等に從ふこと能はず』と。

アークチーラス

我に四ツの太陽あり

其よつの光たゞ一道の電光をなす。

彗星

われは『夜』の恐なり彗星なり。

われ過ぐ、震へ衆世界よ衆太陽よ。

我見るところ爾はおのゝたゞ一粒の芥子なり。

北斗七星

神秘の腕われを常に大空にもたぐ。

われは北天の燈明臺七ツの枝を有するものなり。

わが火は一切の終る大虚のはしに目ざむ。

北極より南極に、あらゆる赤道のもと。

あらゆる熱帯のもと、あらゆる宇宙は曰ふ
『これ恐るべき極天の黒守兵なり』と。

暗き天空の清氣、衆圓球に滿つるもの、

かれ我の何たるを知らず。

我大空に目さむる時彼われを見つめ、

大なる光われの進むとき、

彼たちて震ひて、わが進軍の響を聞かんとす。

彼われを天空にさまよふ巨獸と見なして

われに恐るべき名を與へぬ。

我は北なり、光なり、目なり、

生ける七ツの目、太陽を瞳子とするものなり、

永劫の暗に照る永劫の焰なり、

われは爾等の上に現する北斗七星なり、

天狼は其すべての圓球を合して

猶わが最小の爐中一點の火花に過ぎず。

我が二ツの火の間に百千の世界は悠々としてあり、

われはひかる天空の頂に住む、

彗星の光もみどりの深空に轉するわが車に觸れじ。

天の衆星その黄金の球と

白銀の月とを曳いてこゝに來りかしこに去る、

我もし進んで夫の精氣の大海に入らば

一切の太陽皆わが途に碎けん。

黄道十二宮

爾の道わが道に比せば何かあらむ。

爾の光天のいづこより來るも

皆深淵の底盤たる我にあたる。

我は衆太陽にいふ『爾去れ』

『爾來れ』今爾の順なり『我爾を呼ぶ』と。

我こゝにありて人は緑の空の中に
弓手に逐はれて猛獅、金牛、白羊の走るを見ん、
われまた秘密の井中にかの寶瓶をしづむ。

我は巨大の輪機なり、

無象の秩序われより出で、
かすかに光る深淵に下る、
人目もし空の深奥に入り、おほいなる恐のたゞなかに入らば、

聖きフレガートの流に黒むイキシヨンの如き
恐るべき罪人、苦める、おほいなる魂を見ん。

かれらは高さに到らんとし、
あなたに走る星を棄てこなたに来る星に乗りて

深夜のすこき階段を上らん。

銀河

百萬、千萬、無量億の星。

すこき影の下、きよき覆ひの下、

我は莊嚴なる星宿の森なり、

我は目と光との集合なり、

さびしき、音なき、光の厚みなり、

わがかゝやく淵は常に劫初の流に溢れて

あらゆる爾等衆星の源なり、

嗚呼低きにある星よ、我は爾を去ると違し、

わが宏大雄麗不動の海、

わが無数の太陽の集りは

鈍き爾の見るどころ、たゞ大空の底にありて響の絶ゆる荒漠なり、

暗夜にひろがる紅灰の一片あり、

さはれ我が生ける光の中に入るものには何等の恐ぞ、

わが紅雲を近きに見るものには何等の恐ぞ、

點はおのゝ星なり、星はおのゝ太陽なり、

星限りなし、奇異壯大のもの限りなし。
 或は天使に似たり、或は悪魔に似たり。
 遊星の数はた窮なし。
 宇宙の衆群内に情あるもの生あるもの。
 おのゝの太陽をめぐる。
 人おのゝ心あり靈ありて。
 六合にわたる眼目の映する鏡なり。
 心おのゝ愛あり、靈おのゝ天あり。
 おのゝ生れ、おのゝ死し、おのゝ長じ、おのゝ衰ふ。
 内に光満ち、内に暗溢る。
 わが下の谷の中、わが光に眩めきて
 遠きにかゝやく光りの粒。
 なんぢ衆星、爾衆球、爾彗星。
 爾黄道寰、爾震ひて青白き太虚をわたるもの。

爾の音は遠きに響く胡角に似たり。
 我が太陽を有するは爾が蚊を有するよりも多し。
 わが無限大は生けり、かゝやけり、豊かなり。
 時としては千萬の世界暗き穹窿の隅に迷ふて
 わが光の中に消し去るにあらずや。

星チレユーラ雲

遠きを去る一片の塵、なんぢ誰にか語る。
 大虚の中我殆んど爾の聲をきかず。
 我はたゞ爾を暗光として夜の緑の空の隅に知るのみ。
 我をして静に照らしめよ、我は暗の白きものなり。
 すこぎ混沌の中に生せる幽界なり。
 我は南極なし、北極なし。
 我は理想中の生ける現實なり。
 廣大なる夢の群われよりいづ。

浩蕩たる精氣の大洋涯なく岸なく
其流一たび去りてまた歸ることなし。
中に神秘の島嶼を造るものは我なり。

無限

一切のもの。わが暗き合一の中に生く。

神

我一たび吹かば萬有ことごとく空たらむ。

(譯者附記、固有名詞は皆英利吉讀みとあしたり一定の日本讀みとあれるものは其まゝ)

故郷の墳墓 (ユーゴー作)

一 『冥想録』を亡女のかたみにさゝぐる歌

永遠の眠の床より起ち、冷めたき布の蓋ひを去り、

目を舉げ手を開きて此書を取れ、
こを受くべきものは爾なり。

我が靈魂、わが企望、わが夢、わが恐、わが悲、みな此中に混じ、
わが生の幻、わが痛、わが光のあけぼの、また之に續ける愁の夕、
影とそのあらしと、薔薇とその花冠と、
みな此中にあり。

或は樂しき或は悲き此書はいづこより起れるや、
陰霧をつんざく青白き電光は何處より來れるや、
四歳このかた我は凄冷の風雨に住ひき、

此書はこゝより出で來りぬ、

神は口授しぬ、余は書き取りぬ、

余は風に散る一片の藁なりけり、

靈は曰ふ行けど、かくて余は去りぬ。

而してわが此書を終りしとき。

此書形をとりて初めて動きし時。

壁は緑蘿を纏ひ塔は挽歌に

鐘聲を混する野なかの寺は我に語りぬ。

『爾の歌は終りぬ。詩人よ。そを我に賜へ』と。

風吹き渡る碧の森また曰ふ我そを請はむ』と。

花を點する牧野は曰ふそを我に賜へ』。

海はこの書の開くを見て曰ふ

いかなれば我之を得ざる。かの書また一の舟なるものを。

星は曰ふ『此讚歌を受くべきものはわれよ』と。

おほいなる風また叫びぬ『夢みる者よ。そを我に與へよ』。

しかしてあまたの鳥は曰ふ『人寰を遠く離れて育ちし此書。

君は人間に與へんとすや。わが翼に乗せて之をわが巢に運ばしめよ』。

さもあらばあれ。わが書は風に與へざるべし。

あらしに狂ひて潮を吐吞する海洋また之を得ざるべし。
蜜蛙群がるみどりの野。

時ろの針を轉する野寺の塔また之を得べからず。

之を得んもの牧場にあらず。星にあらず。

鷹にあらず鳩にあらず。すべての鳥にあらず。巢にあらず。

われ之をたゞ墓に與へむ。

二

あゝ昔九月秋風の夕。

飄然友を捨て、われ郷を去りき。

巴里の都はかなたに隠れぬ。知人の影は一も見ぬ。

聲なく言葉なく見るとなく。われ獨り逃れぬ。

たゞこれ然然たる一孤影。

たゞわれ知りぬ。われは其行くべき處に行かむと。

嗚呼『われ惱む』の聲猶わが口に出でざりき。

而して深谷の底に引き入れらるゝ如く、
路の險夷、空の寒温、われはつゆも覚えざりき。

〔往事さながら夢に似て山嶽いたみて聲も無し。〕

母と姉妹と屋裏に哭せる時。

われは失望の力に驅られて起ち、

散髪を北風に亂して。

古寺の傍、蕭條の郊野に行き、

天を仰ぎて彼女の墓に近寄りぬ。

樹林は呷きぬ、來るは父なるものよと。

かくて荆棒を踏みわけて荒墳の間を過ぎ、

苔に掩はるゝ石の上、亂枝のなかに膝つきぬ。

あゝわれ呼びしとき爾の眠いかなれば覺めざりし

一竿を肩にせる無心の漁父等は怪みて過ぎぬ。

「かの思に沈める。夢じるものやたそ」と。

かくて日は暮れぬ、長く印せる地上の影と

夕づゝの光と前後共に消え失せて、

われ獨りわれに聽けるものに訴へつ、

其緑の草の上、わが晴天の暮れ行くを眺めし處に、

點々にがき涙と共にわが萬石の愁をそゝぎぬ。

一片また一片緑の葉を心どもなく摘みどりて

忍ぶは彼がいはいはけなかりし昔の日。

百合の花、薔薇の花を我に持ち來りし時、

さゝやかの手にわが筆とりて、

くれなるの指を染めつゝ、笑みし時、

忍びてかくて墳上に育ちし花の香を嗅ぎて、

冷めたき緑の床を見つめぬ。

其墳壁を貫ぬきて射しはそれか靈魂の光か。

さなり、幽冥彼を奪ひしうれひの時刻、
傷心の空と悲痛の胸とに響けるとき、
妨げあらでわれかの墳を弔ひき。
あゝ今は……流よ、森よ、幽谷よ、彼女は知らむ(然らずや)。
四歳よこせこのかた光照らざる淋しき心、われ行て
夫の墳上に祈らざる——そは我罪にあらざるを。

三

さればかの暗き路、みどりの苔、冷ひやの墓。
陰林咽ぶ夕の野寺。
墳墓に注ぐ悼みの吐息。
その辛さは今しおもへばさちかりき。

この年ごろ爾何事をなしつるや。

暗きすみかの中爾は生命を今見るや。
いかなる影の日時計もて爾は時を測るや。
爾は時に音なく他の眠れるものを押しやりしや。
爾はわれを待ちて半ば目ざめしや。
爾は無限の暗窓によりて影の中に旅人を探しつるや。
暗き永劫の中に来れる者を聴かんとて、
緩く纏ひし葬衣の中より爾は耳を傾けしや。
『ろは誰ぞや、わが父いまだ来らじ』と
かくて沈める船のごと再び暗に身を伏して
聲も微かに爾等ふたり共にわが上を語りしや。
げにのくたびか露を帯びて
庭より心よりわれはた百合花を集めけん。
げにいくたびかわれ野薔薇の花を集めけん。

いくたびか「明日は別れん」とつぶやきて
アルフェールの塔にわれは音訪れけん。
かくて愚にも風と迅き船を待ちわびつ。
まなく我手は悲みて開きぬ。我曰ひぬ「もの皆移る」と。
かくて集めし花束は惨として暗夜に落ちぬ。
嗚呼彼女のあれを待ち詫びんを思ひ
心に秘めし思を取りて
かしこに行かんものに託せんとせしも幾度ぞ。
基督呼びしときラザロは眼を開きにき。
われ彼に呼びしとき彼の目いかなれば開かざりし。
影の秘密をふたゝびも「愛」の破らんとなしつるは。
神のなしゝとを父も爲さんと願ひしは。
そはあやまてる舉動なりきや。

四

微けきたよりの此書いかに
行きてかの沈静に呟きかの岸に流れんとを。
愛の吐息、愛の涙此書いかに
あなたに落ちて墓に入らんとを。
うの墓さきには露と曙と春と接吻と
美はしき花嫁のゑみどもるどもに
わが喜、わが心を呑みさりきを。
いかに此書僞らぬ希望の叫。
嘆の歌、別の聲。
はた羽かせ我に觸るゝ夢とならんとを。
さらば彼女は曰はん「あるもの來りぬ。われ聲をさく」と。
此書いかに暗夜の中わが靈魂の歩みたらんとを。
此書これ曙の白き鳥の。

はた夕暗の黒き鳥の飛びかけりあふ無数の群。

此書これ地平線外に走る『追憶』の翺飛。

此書これ因居の戸よりわが送りやる混沌の群。

空よあらしよ風よ雲よわれ汝に之を託す。

しづかに我に暁く空の大波

いかで此書をいとしみて遠くあなたに送れかし。

風は心して散すとなく

冷めたき墓にまめやかに

離れて遠きわがたまものをいたせかし。

嗚呼げにわびしき卷の中に。

大空の下に集めたるしらべの中に。

此書の中に、歌謠の中に

わが日、わが禍、わが悲、わが煩悶

わが愛、わが勞、わが日々を生を記したれば――

神なほいまだわれのみまかるを許さざれば――

さはれまた我行きて彼に語らん要あれば――

秘密とあらしとに満てる此書の上に――

無限の劫風の吹くを我感ずれば――

人界の暗と哀へと思とを皆之の中に注ぎぬれば――

わが靈わが血わが心より――

此暗ささびしき歌の韻（ミヅノ）をわれの作りたれば――

いざゆけわが書、暗空を過ぎて――

あらゆる遅き歩みの向ふあなたに――

木の葉の如くたましひの如く――

行きて青苦と暗夜と墳塋とに飛べ。

一切の名あるもの、皆はしり行く深淵に行け。

墳墓の最も幽深なるかしこに落ちよ。

さらば彼女の側に、かしこに眠る光る莊嚴の天使の側に見るものあらん此書の——此深淵の幽花の開くを。

五

あゝ曙のみどりの空。爾は我を欺きぬ。
あゝ人界の幸。爾をつらく我は償ひぬ。
世には墳墓に語るものあり。
さびしき青白き死者に語りて
葬衣の黒きひだを震はし。
其言或はあらく或はやさしく
石を動かし波を動かし雲を動かし
恰も森の響の如く自然の一の聲となるものあり。
我いまかゝる伴に加はるの權を得たり。
あゝわれ墓標のたゞなかを進み。

群木叢枝の中に髪を亂し。

靈魂暗に迷ひて棺上にうつむき。

鉛に釘に地上の虫に。

冷かに笑める骸骨に。齒を喰ひしはる骸骨に。

指固まれる手に。頭骨に。

祈禱を知る脛骨に悟を求めしも幾歳ぞ。

あゝ我すべてを穿ちぬ。すべての底を探らんとしぬ。

禍福いかなれば世にまじる。われ之を知らんと願ひき。

われ問ひぬ『我何をか信すべき』と。

われ光と曙とはまれと

たのしき幼子と清き乙女と

愛と生命と靈魂と皆悉く之を究めぬ。

我何を學べりや、われすべてを攫みて一も得る處あらざりき。
我多くの夜を見ぬ、我多くの空しきをなしぬ。
吾人何ものぞ、『つねに』の語は何の意味ぞ。
われ胸中に穿てる墓に
夢と愛と望とを皆悉く葬りぬ
誰か悟を得る、教いづくに在る。
あゝ我ふたゝびいにしへに返り
草のうへ牧場のはどり森の傍、
夕焼けの空には、ゑみて幼きむすめの
自さ小さき手を取りつ
喜に溢れ平和に満ち。
空のかゝやくにまかせ、小兒のあまゆるに任せ。
かの碧空とかの無心とに身の浸さるゝを感じ得ましかば。

光る大神と、敬ふ天使と。

われ此間に争ひぬ、われ勝ちぬ、恐なかりき、悔なかりき。
俄にわが門「死」の前に。

恐るべき暗影の不意の音づれに開けぬ。

あゝ神秘の靈爾たま空しく碎けしものを残して去りぬ。
爾わが天使を捕へぬ、爾彼を打ちぬ。

それよりこのかた墓はわが足の向ふ處となりぬ。

六

セインの岸の逍遙も今は叶はず。

われいにしへの道に今は行かじ

井のうちに座る洗婦の如く

永劫の深淵の壁に突き當るの外はあらじ。

恐るべきソリムの爲め巴里はわれに閉されぬ。

ノートルダムの高塔は今沈黙と暗夜とを有するのみ。

而して頭上にわれは星辰の殿堂を仰ぐ。

吾は叫ぶ「ルリアン、井レクユール、カアデベック」云。

『影』はわれに叫ぶ「オレブ、セドロソ、バルベク」云。

而して吾去らんとすれば『影』直ちに我を留めて曰ふ。

『みせりの大空に向け』と。

われにいふ「爾の路は塞がりぬ。

爾いま夜と風と流とを見よ。

爾何をか思ふ。幽獨者。爾何をか爲す。

爾足下に大地ありと思ふや。

運命を離れて心ともかく爾何れに行かんとするや。

あゝ夢むる者。爾萬有天地を顧みて

波浪の中に靈魂の響を聞け。

爾もし世に意あらば顧みて俗界の煩惱を思へ。

爾もし髪に塵を混せんとせば

せめては巨大の塵を求めよ。

爾道の爲めに苦むも猶之を外にして

おほひなる寂滅を見よ（寂滅爾の意に適はゞ）。

爾専ら再びのぼるべき天上界に頼りて

そこに爾の一片の塵骸を捨てよ。

あゝ天より流竄せられしもの

手を故園の星辰界にのべよ。

爾その曙の再びかしこにあくるを見よ。

爾おほひなる一切を見るおほひなる目となれ。

爾萬有の融化し終るかのおほひなる神秘を思へ。

うまるゝ、生ける、進める、亡べる、崩るゝ。

一切の人類、一切の墳塋を思へ』と。

さはれ我心常に痛む。其痛むほとり常に同じ。

蒼天暗夜永劫遂に

一の靈を亂し一の塵を靜むること能はず。

天上穹窿の莊嚴の光

以て涕を乾かすに足れりや。

あゝ天地は荒涼の墳墓すみわたる夕。夢むる森。

やさしき月をわれに且示し且説くぞよき。

我はしづかに之を聞きてしづかにやさしき眠に入らなん。

七

あゝ花を、あゝ花をわれ集め得ましかは。

われかの二の冷めたき床に百合の花を集め得ましかは。

われ花をもてわが青白き天使を蓋ひ得ましかは。

花は金なり碧玉なり黄玉なり瑪瑙なり。

花のたゞなかにこそ棺は埋まるをねがはめ。

花は死者を愛す。神は其根をして

骨に觸れ其香をして靈に觸れしむ。

我かれを愛せしも今之をよくせざれば

われのあなたに再び行くを神いま許したまはざれば

冷めたき運命彼我に迫りて父は悲み子は眠り

追竄われを苦めて墳塋彼をおほひぬれば

今は一片の草葉をもわれ彼の無聲の墓に投ぐるを得ざれば

されば彼女少くも我靈を得んこと善からずや。

あゝわが屋上に叫ぶさびしき風よ。

あらしよ冬よ其電もて我瓶を打てるものよ。

海よ夜よわれ彼の爲めに此書の中にわが靈を置きぬ。

此書を取りて而していへ『こはわが後に

残りて夢むる生者より來ぬ』。

魂よこの書を取りて遠く隔つとも我聲を知れ。

あゝ爾の灰は我が息みの床なり。

爾の墓はわが望なり、わが愛なり、わが信なり。
爾の葬衣は常に生命とわれとの間にひらめく。

いざ此書を取りてこゝより神聖の歌頌をおこせ。

爾の暗き手の中に此書いかでまぼろしとなれ。

此書わが天使の眼に照されて

曙のごとく白うなりゆけ。

吹く息にそだつ爐火の如く

夕に過ぎ行く光の如く

香爐の火花のあらしの如く

行きて流れて遠く跡なく

やがてすこくかゝやく爾の目の下に

書の幾丁星となりて皆暗中に去れよかし。

八

嗚呼人何を爲すも人何を語るも

其靈或は天馬の翼に飛ぶも

或は昆虫と等しく地上に這ふも。

微かにひかるケッセマテよ、人は常に

人は常に爾のさびしき洞窟に到らむ。

あゝつらき怪しき悽愴の巖。

靈魂と運命との争ふ處。

慘澹たる造化の幽淵の戸口。

欲情の獸近より臨みて震ふ處。

更にあやしきすさまじき「憂」の

悄然として髪を乱して入る處。

あゝ墜落よ、隱退よ、幽谷の門よ。

ゆくゆく我生の窮まり盡くる處。

歳月の泥に印せる吾人の歩み止まる處。

禍ごとに重うして松柏のうれひ悲む處。

陰影陽光相まじりて天使の驚き震ふ處。

吾人はつねに此幽居に來り

こゝに思にたへず情として曰はず。

あゝ逝ける者安かれよ。眠れ眠れ眠れ眠れ

しづかに形を替ふる渾沌無數の群

眠れや野、眠れや花、眠れや墓。

眠れ人家の屋壁、墳塋の堆石。

眠れ林下落葉の堆、眠れ巢中羽毛の片。

眠れ眠れ草葉の微片、眠れおほいなる無窮の群。

しづまれあらゆる樹木あらゆる果草。

しづまれ悶に湧きたつ大洋の波

しづかに聲なき死者の沈黙

莊嚴神聖なる敬神の恐、皆悉く休へよ。

恐るべき疑、おほいなる不信の暗。

おそろしき沈黙幽微のもの

自然、中心、周圍、内外。

一切の渾沌、上帝の幽獨、皆悉く静かかれよ。

あゝ霧深き呼吸に走る塵界の民。

あゝ原上を走るものすおき歩しづまれよ。

眠れ爾泣くもの、眠れ爾疵つけるもの。

『憂』よ、『憂』よ、『憂』よ、爾の聖き眼を閉させ。

あらゆるもの宗教なり、悔慢のもの一もあるとなし。

あらゆる生物のうへ、あらゆる受造のうへ

あらゆる善惡禍福のうへ

やさしき、はげしき、うるはしき、いやしきすべての上

見よおほいなる天の平和の四方より降るを。

あゝ眠れる地獄は天堂を夢むるよ。
 流よ海よ風よ魂よ皆ことごとく静かなれ。
 見よ今上帝の前山嶽の上
 絶崖の側にたちて星と人間と
 天上の萬事と暗空の彗星と
 あらゆる渾沌とあらゆる万有との現はるゝを見るところ。
 暗に眩し惑に酔ひ
 無限の太空に天象の畫かるるを見て
 傷み惱めるさはれ思澄める冥想の人
 鋼鐵の壁上に人生の問題をしるし。
 怪奇渾沌のたゞなかに曉を見んとして
 震ひて茫洋の深崖にたち。
 かけり飛び行く白鷺の目を追ひて
 慘として光と色と曙とに伴はれて

烟露うづまく幽谷のはのかに現はれいづるを見る。

(註)

(一千八百五十五年十一月二日ゲルンセイの講居に於て)

一千八百四十三年二月十五日ユイゴの長女レオポルティン其戀人
 シヤル、ツツケリイに嫁して平和幸福の生を送りしが同年九月四日
 過ちて夫妻共にセイイン河に溺死しぬ、本篇中「爾等二人」等の句は此夫妻
 を指す也。

附録終

明治三十四年五月十五日印刷
 明治三十四年五月二十日發行
 明治三十四年八月廿五日再版
 明治三十五年七月五日三版
 明治三十七年六月一日四版

著作
 所有

發行元

著者 佐土
 發行者 山
 發行者 鈴
 印刷者 石
 印刷所 木活版所

定價金四拾錢

佐有千養

井林吉
 仙臺市大町三丁目廿五番地
 藤養治
 仙臺市名掛町五番地
 本音四郎
 仙臺市新傳馬町六番地
 井弘
 仙臺市大町一丁目卅一番地
 木活版所
 仙臺市大町一丁目卅一番地
 閣書店
 仙臺市新傳馬町六番地
 書店
 仙臺市名掛丁五番地



1. CHIBA
 III 17.5

特約大賣捌所

東京神田區表神保町	東京
全 全 裏神保町	上 田 京
全 京橋區南傳馬町二丁目	目 黑 甚
全 日本橋區通一丁目	大 倉 書
全 全 橋町一丁目	大 草 常
全 神田區雉子町	岡 崎 屋 書
全 全 美土代町	文 陽 堂 書
大坂南區安堂寺町四丁目	田 中 太 右 衛 門
全 東區安土町四丁目	積 善 館 本 店
全 東區備後町四丁目	吉 岡 平 助
全 東區北久太郎町四丁目	岡 本 仙 助
全 東區南本町心齋橋通り	金 尾 文 淵 堂



有千閣發行目錄

四竈先生作歌曲 育鐵道唱歌 一集 二集	正價金四錢 郵税金貳錢	草野柴二著 致文集 正價四十錢 郵税金六錢	繪具皿斗り 七色入 正價金六錢 郵税金二錢	橋本青雨著 蘆原綠子畫 草 正價金卅錢 郵税金四錢
增補仙臺案内 全	特別三十錢 郵税金六錢	小學生徒用書 見臺 一個 金三錢	仙臺市役所御藏版縮寫 正仙臺市街圖 正價金五錢 郵税金貳錢	長野縣中學校教諭入江祝衛先生著 日本俗語文法論 正價四十錢 郵税金六錢
改訂七等三輪秀春先生著 正宮城縣全圖	正價十五錢 郵税金貳錢	東北音樂會長四竈訥治先生合著 德教唱歌 紙員六十餘頁 定價十五錢 郵稅不要	東北新聞記者百足登編 青森聯隊 雪中行軍 正價金十錢 郵税金二錢	東北音樂會長四竈訥治先生著 附、白虎隊の快活なる樂曲、白虎隊の詩、 義士白虎隊歌曲 洋裝美麗全一冊 郵稅共金六錢
小學綴作文帖 多數御入用、節ハ割引ス	正價金四錢 郵税金二錢	仙臺櫻田先生著 松島圖誌 全 正價十五錢 郵税金二錢	獨逸大家クレー原著 日本草野柴二譯述 ヘルマン・ウンツ、ドロテヤ	

仙臺市新傳馬町四番角 (有千閣支店) 電話 (マヤ) 路電
仙臺市分町五丁目 (有千閣支店) 電話 (番六〇三)

近刊書目

ハイネ評論	近刊 全一冊	插畫數葉	定價金 參拾五錢
獨乙大家詩評	近刊 全一冊	插畫數葉	定價金 貳拾五錢
白水郎譯	最近刊 全一冊	插畫數葉	正價金 貳拾錢
西詩餘韻	最近刊 全一冊	插畫數葉	郵税金 四錢
農學士 今井秀之助先生著	洋裝菊判 全一冊		定價金 參拾錢
農藝化學士 增訂三版	洋裝菊判 全一冊		郵税金 四錢
猿倉捨夫著	插畫數葉 四六版美本		定價金 拾五錢
多情の軍人	插畫數葉 四六版美本		郵税金 四錢
莫越庵著	插畫數葉 四六版美本		定價金 拾貳錢
ざつなう	插畫數葉 四六版美本		郵税金 四錢
敷島おぼろ著	菊判半裁 全一冊		定價金 貳五錢
從			郵税金 貳錢

仙臺市名掛町五番地

發行元 尚文館

再版 逍遙遺稿

故文學士・中野重太郎著 宮本正貫 小柳可氣太 編次

近刊 全壹冊

和裝菊判舶來紙 三百五十餘頁 正價 郵稅未定

逍遙先生ハ伊豫宇和島ノ人大學ニ入リテ漢文學ヲ專攻シ夙ニ俊秀ノ譽儕輩ニ高ク殊ニ天稟ノ詩才ハ一枝ノ彩管ヨリ進リテ胸裏ノ感懷ヲ歌ヒ其光芒爛トシテ騷壇ノ一方ニ輝キ先進知己ノ望ヲ先生ニ囑スルヲ頗ル大ナリシト雖モ悲イ哉天歲ヲ假サズ明治廿七年其ノ業ヲ卒ヘテ僅カニ四月重キ病ヲ得テ遂ニ不歸ノ客トナレリ翌年同志相計リテ其遺稿ヲ出版シ之ヲ知人朋友ニ頒チシモ非賣品ナリシヲ以テ年毎ニ増サリユタ江湖ノ需用ニ應ズル能ハズ依テ今般弊舖先生ノ兩親ニ乞フテ之ヲ再版ニ附シ且ツ新タニ先生ノ書簡數十通ヲ添ヘテ廣ク佳客ノ求ニ應ゼントス一度先生ノ詩篇ヲ誦スレバ熱烈ナル多情多憾ノ辭眞摯ナル清純高潔ノ想胸臆ニ迫リテ棘々人ヲ動カスモノ誠ニ詩界ノ珍ナリトイフベシ希クハ詩ヲ愛スルノ士一本ヲ購フテ花晨月夕吟嘯ノ友トセラレシムコトヲ

發行元

仙臺市名掛町五番地

尚文館

草野柴二著

言文致文

今後の日本文体は言文一致であるといふを最早動かすべからざる議論で其わけも長らく讀賣新聞にも見へ其他にも諸大家の意見があつた。たから議論はこの位ひにして今からは其言文一致の實行を取かゝるをた。其先鋒としては山田美好子の次は堺枯川子の各出版されて文例を示した。しかも彼等は文例として出たので稍簡單に失する嫌ひがあるやうに思ふ。この二家に次いで敢へて其欠を補ふといふほどの大望ではないがこは言文一致實行を一日も早くしたため、一は稍や繁雜な事を書いて見やうと思つて著者は此本を出す事とした。種類は手紙の文、日記の文、記事論説の文及び雜文などを集めた。

仙臺市新傳馬町六番地

發行所

東北圖書出版舍

(四)

洋裝全一冊

定價金參拾錢

郵稅

金六錢

獨逸大家
日本
草野柴二
原著
譯述

シマンウントドロイヤ

西獨逸の一邑に或る豪農があつた。父は素朴敬虔で、稍々東洋的の専制家、母は「仁愛の乳汁」に充ちた、情深く操正しい婦人。その昔の大火事、縁で今の良人は命に當つてその難をさけて、この地方にきた中に、ドロイヤといふ妙齡の處女があつた。温順貞淑、俠勇、正義の徳を備へて、容姿は素より世の青年を魅する足るほどのあつた。青春多血のヘルマンは全くその擒となつてしまつた。ついに此物主人は幾多の障礙を経て目出度僥を契るこいふのが本篇の荒筋だ。以上の人物のほか、眞面目な牧師あり、骨稽な藥種屋あり、この二人がヘルマンとドロイヤの媒酌どぶて活動してゐるから、面白くと受合と誰やらが保證しておく。

洋裝全一冊 正價金貳拾五錢

郵稅 金四錢

仙臺市新傳馬町六番地

東北圖書出版舍

(五)

發行元

平福百穂氏書
清水橘村著

野人

(集詩体新)

洋裝全一冊 正價金參拾錢 郵税金四錢

詩人キヨオテ氏曰く「詩の含めるものは
即是れ詩人の世を含めるものなりそは誰
もは奪はず誰もは縮めず、唯れはひて暗
からしむること有る可きのみ底事よら
す影をかへり見て自ら喜ぶやうなること
を本こしたるはわが取らざる處なり」こ

仙臺市新傳馬町六番地

發賣元

東北圖書出版舍

農學士今井秀之助先生著
農藝化學士

稻作改良論

增訂 新編 實地 三版

洋裝全一冊 正價金參拾錢 郵税金四錢

本書ハ實地家ヲ以テ稱セラル、今井先生
ガ農事巡會教師トシテ實地ニ臨ミ其當業
者ニ講授セル稻作改良ノ方法ヲ最モ平易
ノ文章ヲ以テ編綴修補シタルモノニシテ
通俗農書トシテ而カモ其處政ノ老實的確
ナル恐ラク本書ノ右ニ出ツルモノナシ本
著ノ如キハ眞ニ斯業改良ニ志アルモノハ
座右欠クベカラザル良書ナリ請フ當業者
諸君陸續御購讀アラントナ

チャルスデッケンス原著
草野柴二譯述

頭註 クリスマス、カロル

洋裝四六判全一冊
定價 金百餘頁
郵税金三十五錢

千八百四十三年十二月一首の祝歌あり、私利慾の夢より全英國民を挽きたるが、此の祝歌たるや鳥に
よつて唄はれしに非ず實にチャルスデッケンスによつて也き、著者は其歌を一個のクリスマス、カロル
と名づけたれどもアングゴサクソン人は爾來これを唯一無二のクリスマス祝賀と呼び、其狀恰も基督の
降生以來此書に匹敵すべきもの絶無と爲せる如し、實に其純潔なる好音は基督降誕節其物の如く、毎年
歌はる、毎に熱心なる歓迎を受く、餓へたる耳は之に優れる好聖詞を曾て聞きしとなし、餓へたる目之
に優りて眞實なる且愛心深き好文字を讀みしとなし、若し夫れ滑稽諧謔の巧妙にして無盡藏なるに至つ
ては眞に空前絶後なるべし、譯者さきにゲーテのヘルマン、ドロテヤを譯出して俄然として獨逸文學界
に重きを爲されたり、今や圓熟せる言文一致を以て此大著を翻譯す、我英文學壇を騒がさんこと必せり
頭註亦丁寧親切、青年學生を裨益すると多大なりと信ず、乞ふ愛讀を賜へ

仙臺市名掛町五番地

發行元

尙文館

有千閣發行目錄

農藝化學士今井秀之助先生著
 訂正三版 稻作改良論
 新編實地 菊田定卿編纂
 〔正價三十錢 郵税金六錢〕

現行公用文例類纂
 特別 〔正價五十四錢 郵税金十錢〕

曉鐘 第三版
 特別 〔正價卅六錢 郵税金四錢〕

清水橋村著 野人
 〔正價三十錢 郵税金四錢〕

吉野臥城著 野茨集
 〔正價三十錢 郵税金四錢〕

大和田建樹先生作歌上眞行作曲
 文部省檢定濟 富士唱歌
 〔正價金六錢 郵税金二錢〕

佐々木信綱君序 吉野甫君編著
 新韻集 短歌美文 全
 〔定價三十錢 郵税金四錢〕

根本幹太郎編 宮城縣立學校
 入學問題 試驗答案集
 附 陸軍士官學校問題 海軍機關學校問題
 海軍機關學校問題 宮城縣小學校教員檢定試驗問題集
 〔正價二十錢 郵税金四錢〕

佐々木巴陵先生謹書
 三體精華帖
 〔木版和裝美麗 定價金五十錢 郵税金四錢〕

此書ハ我國家教育ノ方針國民道德ノ基礎タル教育ノ御勸語ヲ漢文ニ直シテ佐々木巴陵先生ガ丹精ヲ凝ラシテ三體ニ書カレタモノナリ
 東京音樂學校教官鳥居沈先生校閱
 東北音樂會長四竈訥治先生作歌曲

竹に雀
 〔壹冊定價金四錢 郵送金二錢〕

勇烈天下に隠れなき豪傑勤主家上杉謙信公の遺蹟を作歌し猶ほ之に壯快なる樂曲を配し欣唱喜奏の間に世の鑑となる其の偉徳を悟らしむる良歌曲なり

仙臺市分町五丁目 有千閣支店

仙臺市新馬町(東四番角) 有千閣書店
 電話(マヤ) 三〇六番